

七月三十日午前十時十五分、泰國國際航空機にてバンコク出發、機内にてヴェジタリアンの晝食を濟ませ、午後零時廿五分ネパールのカトマンドウ空港に到着す。泰國とネパールとは時差一時間十五分、凡そ三時間廿分の飛行なり。バンコクの空港は巨大なるハブ空港なり。其と比較するにカトマンドウの空港小規模にて日本の地方空港の如し。入國手續の後バスにてホテルに直行す。車内にてネパール人の現地案内者紹介有り。此れより十二日間行動を共にする事となりぬ。日本語力充分にて、意思疎通に問題無し。今一人は現地旅行會社の社長にて、我ら全員の旅券持ちてムスタン入りの許可入手に向ひたり。ホテルにて部屋割り。余の同室者、S先輩なり。他の部屋割りも見るに最良の選擇を喜ぶ。

一旦解散の後、午後三時一階ロビーに集合、カトマンドウ市内觀光に向ふ。世界遺産ダルバール廣場見學。觀光客氣儘に寺院の階段等に腰掛け喫煙す。宗教的嚴肅さ感ぜず。印度に比較するに、物乞ひ、動物の糞少なく、歩き易し。

クマリてふ生き神有り。ヒンドウ教の大女神ドウルガ、ネパール王國の守護神タレジュ女神、佛教徒からは密教女神ヴァジュラ・デーヴィが宿るとす。初潮前の怪我病氣無き美しく利發なる少女、クマリに選ばれる。ダルバール廣場南側に木彫りの窓枠美しき建物有り。クマリの館なり。「運良かりせばクマリ窓に現る」とのこと。其館に入らんとするも、クマリ現れたる時の獻金の爲、先づネパールピー入手す。余は取敢へず五千圓のみ兩替せり。クマリの館に戻り、中庭に入る。ガイド氏曰く「現れさうなり。」クマリの窓の左に男性有り。彼がクマリの行動を決定すや。

クマリ現る。小學校三四年生なりや。聲を發するでも無く祝福の仕草をするでも無し。余も只合掌し拜むのみ。寫眞撮影は禁止なり。數年前の王政廢止後もクマリ制度存續す。されど今後如何なる事となるや豫想能はず。クマリ拜謁は此れが最後の機會やも知れず。西洋文明からは兒童軟禁、虐待との解釋、意見有りと聞く。現在のクマリも間も無く初潮迎へ解任と成らん。獻金は志のみとの事にて、貨幣價值良く理解せざる儘に適當に札を選びて賽錢箱に投入せり。

宿に戻りスーツケースを開きて荷物整理す。さてスーツケースを閉ぢんとするに閉まらず。留金毀れたり。(續く)